

## ビバハウス便り NO.58 高生研第46回全国大会（青森）に参加して

ビバハウス運営委員会 委員長 安達 俊子

今年の夏は、初めての1ヶ月の夏休みを頂いた。これまで7年間、ほぼ1年365日のビバハウスを続けてきたが、さすがに夫69歳、若い者には負けないとの気持ちばかりで勝負してきた私も考えれば67歳、可愛い孫を抱っこして、一日ゆったり暮らしても人様に不思議がられない年になっていたのだ。それで今年の春ごろから、『1年は12ヶ月あるので、大半の10ヶ月は、私たちが子どもさんの面倒を見させていただきますので、あとの2ヶ月、夏の1ヶ月とお正月の1ヶ月は、是非親御さんが見てください』とお願いした。

勿論、長期休暇の必要性は、何よりも私たちスタッフの休養と充電が直接的な理由だが、単純にそれだけではない。今全国の自立支援施設で、個々の支援指導者が、これ以上業務を続けられないと言うケースが続出していると聞いている。そればかりでなく、施設自体がこれ以上業務を継続できない（燃え尽き症候群~バーンアウトとも呼ばれる）状況にまで追い詰められているところもあると聞く。若者たちを中心にして、親御さんたちと、施設側が、困難をともに分かち合いながら、最善の相互協力で、立ち向かわない限り、この困難な仕事は継続できないことを理解してくださる多くの皆さんのお蔭で、初めての長期休暇の実現となった。

ところが、休みはただ休みではないことをすぐに知らされることになった。7月31日から8月1日までは、青森に行かなければならないことになっていた。もう4年も前から、北星余市での私の教育実践と、それからのビバの活動に、多分日本で一番関心を持ってくださっていた大阪の高校生活指導研究協議会(高生研)の佐藤功先生のお誘いで、高生研全国大会での発言を求められていたのだ。大会スローガンは、『生活指導の中での学びとは何か?』私の一番関心を持ってきたテーマだ。そして、私たちの為に準備して下さった「問題別分科会」のテーマは『ともに育つ、響きあって育つ』というものだった。もうこのテーマの設定だけで、佐藤先生たちがどれほど温かい思いと深いご理解で私たちの実践を見守ってくださっているのかが痛いほど感じられた。

分科会に参加した大勢の皆さんから、私たちとはじめて直に話し合えて、本当によかったとの感想を大会後にお寄せいただき、もうそれだけで、頑張っただけで大会に参加して、私たちこそ学ぶことが多かったと心から感謝している。『教育見取り図(70年代~現在)』を作って、分科会で私の北星余市とビバハウスの実践を、この時代の教育全体の流れの中で位置づけて下さった、大阪高生研の井沼淳一郎先生は、『全国の高校が、生徒の荒れと強圧的な管理の強化で対峙していた80年代に、既に北星余市高校では、『仲間、友情、団結』を旗印にした、『自主規律』の精神で、『暴力追放宣言』をしていた。』さらに、『ようやく引きこもりや、ニートが社会問題になったのは、2002年の精神科医齊藤環氏の発言や、2004年の玄田東大助教授の問題提起であったが、ビバハウスがこれらの若者に全く独創的に立ち向かったのは2000年である』と書いて下さった。ただその時々必要に迫られて、全力で立ち向かったことごとが、何だったのかを今教えて頂いている気がする。